

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00044

研究課題名（和文）スコットランド啓蒙思想の痕跡と現代的意義

研究課題名（英文）The mark of Scottish Enlightenment and the meaning in modern philosophy

研究代表者

中村 隆文（Nakamura, Takafumi）

神奈川大学・国際日本学部・教授

研究者番号：40466727

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀スコットランド啓蒙思想がいかに現代思想に影響を与えたものであるかを思想史的かつ分析哲学的に分析・検証するものである。研究期間の途中でコロナ禍により学会が開催されなかったり研究が中断することもあったが、期間中に国際ヒューム学会（Hume Society）に三回出席し、うち一回は司会を務めるなど、海外研究者との今後の連携につながる活動をしたほか、2021年には日本法哲学会年次大会のワークショップで報告を行い、その内容と関連したスコットランド啓蒙思想の意義を、2022年に上梓した『物語スコットランドの歴史』に組み込むなどし、一定の成果を上げたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

思想史だけでなく、実際の社会生活においても「理性的であること」が強く求められ、共感や感情といった要素はノイズとして捨象されてきたように思われる。しかし、欧米ではすでに司法における感情的要素の積極的意義を唱えられているし、経済学においても行動経済学のように人間の感情的で不合理な面に着目した研究がなされている。

本研究では、その先駆的事例として18世紀のスコットランド啓蒙思想、とりわけデイヴィッド・ヒュームの道徳感情論を分析し、それが残した影響とともに、思想史においてその重要な部分が一部捨象されてきた点を指摘し、現代的観点においてそれがどのような意義をもつものであるのかを論じた。

研究成果の概要（英文）：This research aims at demonstrating how Scottish Enlightenment in the 18th century had the influence on contemporary philosophy nowadays. Although there were some crucial interruptions of research due to the Covid 19, finally I took part in Hume conference three times, as a chairperson in one of them, and established some research relationship to foreign researchers and had a presentation at Japan Association of Legal Philosophy in 2021. And then, I published a book, titled "Tales: the History of Scotland" that includes some themes of Scottish Enlightenment that have been related to this research. All thing considered, it seems that this research achieved what I prospected to some degrees.

研究分野：思想史

キーワード：スコットランド啓蒙思想 道徳感情論 ヒューム 正義論

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景を説明したい。従来、現代分析哲学や法哲学、経済学などにおいては、「理性的な人間はどうあるべきか」「行為はどうやって理に適った形でなされるか」といった理性主義的アプローチが主流であったし、人間社会の共存のためのロジックを模索する合理主義が強い影響力をもっていた。

しかし、2010年代中盤以降、西洋的な合理主義批判として、共感やエンパシーに関する研究が、哲学分野だけでなく、法学、心理学、行動経済学、さらには動物行動学においても盛んとなっていた。ただし、そのほとんどがアダム・スミスやデイヴィッド・ヒュームの言説を断片的にのみ用いるばかりであって、彼らのバックグラウンドであるスコットランド啓蒙思想というものがかなり捨象されている感があった。それを踏まえ、現代のそうした研究につながるそれらの思想を生み出したスコットランド啓蒙思想を分析しようと考えたのが本研究の背景にある。

## 2. 研究の目的

本研究は、18世紀のスコットランド啓蒙思想における道德感覚論および道德感情論を論者ごとに比較・分析し、そのうちのどれがどのように変容しながら、現代的な議論に影響を与えているのかを検証することにある。

具体的には、現代思想において、反理性主義として取り扱われる。デイヴィッド・ヒュームの道德感情論をベースとした「ヒューム主義」が、本当に理性主義と徹底的に対立するものであるのかを検証し、ヒューム主義の観点から、人間社会の共存やリベラリズムといったものの可能性を模索すると同時に、ヒューム思想の背景にあるスコットランド啓蒙思想の意義を、古典研究を丁寧に行いながら現代的な形で再発見してゆくことが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

18世紀のスコットランド啓蒙思想における道德感覚論として有名なフランシス・ハチスン、それにデイヴィッド・ヒュームやアダム・スミス、トマス・リードなどのテキストを詳細に比較・分析し、それぞれの論者のどの部分がどのように関連し、またどのように異なるのかを対比する。

とりわけフランシス・ハチスンとデイヴィッド・ヒュームとの関連性について詳細なテキスト分析が行われた先行研究はそこまで国内において多いものではなく、またハチスンがスコットランド啓蒙の創始者であるとともに、ドイツやイングランドといった他国からの自然法や自然主義思想をどのように受容したのかもまた掘り下げて研究する余地があるため、本研究の基礎部分としてこの点を重視した。

その後、現代的な分析哲学、とりわけヒューム主義と呼ばれるものが本来のヒュームの意図をどの程度継承しているのか、そして、なにが見失われているのかを抽出し、後者が現代においてどのような積極的意義をもちうるものであるのかを提示した。

## 4. 研究成果

まず、古典的テキスト分析から明らかになったことは、18世紀前半のグレートブリテン期において、先進的なイングランドよりも学術的に遅れていると思われがちなスコットランドにおいて、イングランド以上に先進的でリベラルな自由主義思想が芽生えていたということが確認できた。しかしそれは必ずしも理性主義というものではなく、長老派カルヴァン主義という宗教的要素が絡んだ、学術的には不合理な世界観・自然観によるものであったのだが、それがイングランド的な自然主義と交わりつつ、人間社会を一つの分析対象として冷静に、しかも、研究対象として切り捨てられがちな「情念」にまでスポットライトをあてたという点では画期的であったことがわかった。情念主体を、通常的行為主体とみなさない理性主義的スタンスは18世紀のイングランドだけでなく現代まである程度継承されたトレンドではあるが、スコットランド啓蒙思想はそれを人間に関する事実としたうえで、その事実を踏まえ、現実主義的な観点から、そうした人間同士がうまく共存できる社会を模索したといえる。

また、本研究において明らかにされたそうしたスコットランド啓蒙的な人間観は、現代的な法や正義を取り扱う分野においても重要な意義をもつように思われる。「主体性」とは、自律性と合理性をそなえたものとみなす考え方はカント以来、現代の法・正義論にも継承されているが、しかしそれは実際の間人モデルを踏まえたものとはいえないし、だからこそ、エリート主義的な合理主義的人間モデルやそれをベースにした法体系が、一般人からすると理解しがたいものになっているという正義感覚の乖離や分断が生じているようにも思われる。昨今の、「法と感情」という研究テーマが欧米で流行しているのもこうした事情があると思われるし、また、日本における司法改革として裁判員制度が導入されたことも、こうした分断が背景にあると思われる。本研究は、そうした「法と感情」の研究に、これまで注目してこられなかったスコットランド啓蒙

思想という観点からアプローチすることで、イングランド的な理性主義とは異なる人間観・社会観・正義観を提示することができた。

スコットランド啓蒙思想はこれまでの思想史のなかその感情モデルは捨象されるか、合理主義の論敵としての意義しかもってこなかったが、道徳感情論を唱えつつもリベラルな近代社会のビジョンを描いたスコットランド啓蒙思想のそうしたスタンスは、過剰な理性主義への疑念が蔓延するこの現代社会においてこそ必要であると思われるし、本研究においては或る程度そのことを提示することができたとと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村 隆文
2. 発表標題 「ヒューム哲学はなぜ法哲学のメインストリームとなりえなかったのか？」
3. 学会等名 日本法哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村隆文
2. 発表標題 LPから乖離するナッジ
3. 学会等名 行動経済学会第13回大会パネルディスカッション（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中村隆文	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 250
3. 書名 物語 スコットランドの歴史	

1. 著者名 中村隆文	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 202
3. 書名 組織マネジメントの社会哲学 ビジネスにおける合理性を問い直す	

1. 著者名 中村 隆文	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 世界がわかる比較思想史入門	

1. 著者名 中村隆文	4. 発行年 2019年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 リベラリズムの系譜学 法の支配と民主主義は「自由」に何をもたらすか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------